

ハーレーダビッドソン
ライフ マガジン
バイブス

平成11年6月10日発行（毎月1回10日発行）第5巻第6号（通巻52号）平成7年5月29日第3種郵便物認可

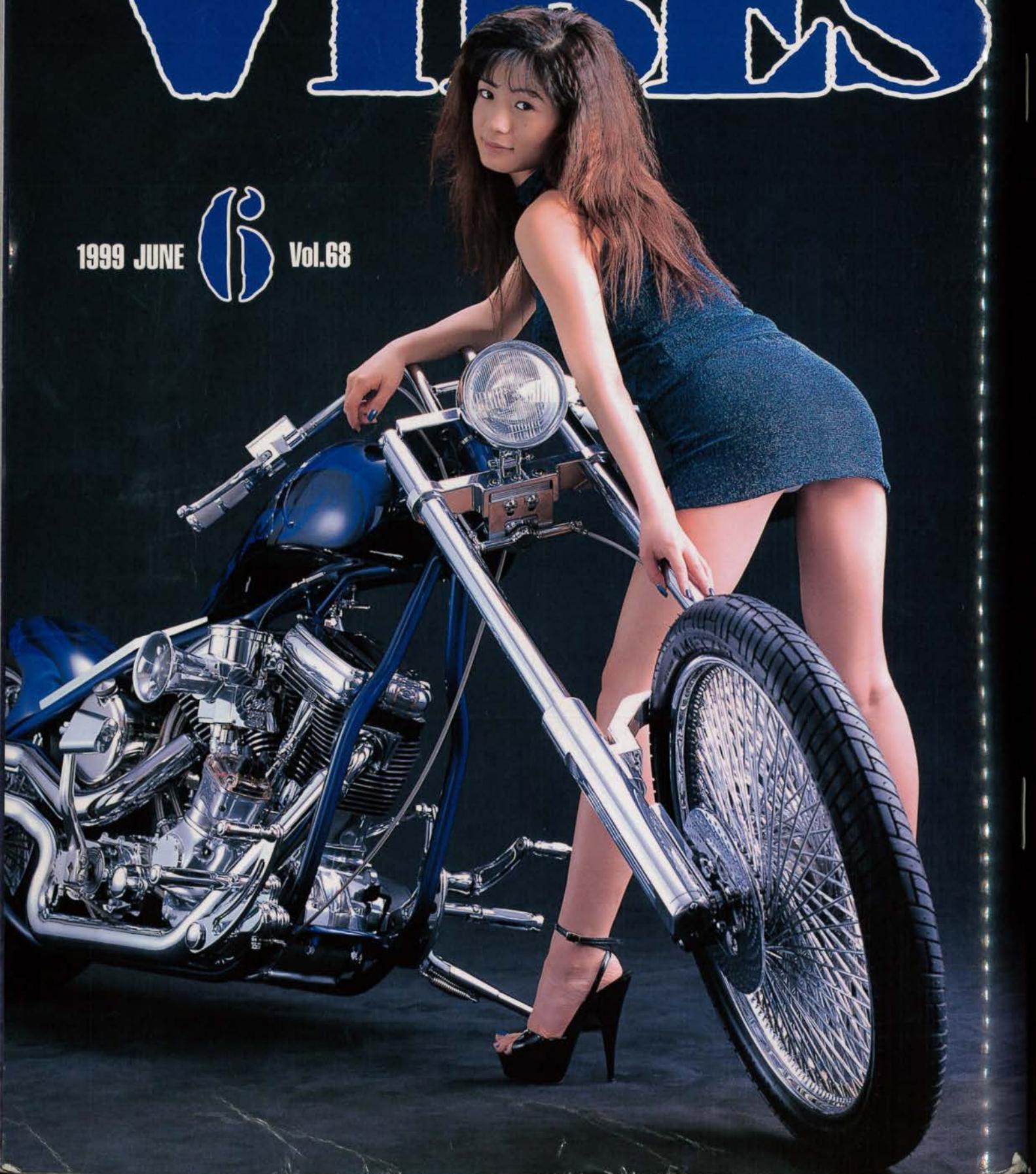
Harley-Davidson
LIFE MAGAZINE FOR BIKERS

VIBES

1999 JUNE



Vol.68



1999
JUNE



Vol.68

C
O
N
T
E
N
T
S

ハーレーダビッドソン
ライフ マガジン
バイブズ

平成11年6月10日発行 (毎月1回10日発行) 第5巻第6号 (通巻52号) 平成7年5月29日第3種郵便物認可
Harley-Davidson
LIFE MAGAZINE FOR BIKERS

VIBES



■卷頭特集:心の鼓動 12~21 ————— 6

VIBRATING Special

- AMERICAN BIKER'S HISTORY IN JAPAN
鼓動の見聞録② 1940~50年代 — 26
H-D VIRGIN ROAD [SCREW]
H-D初めて講座 [ネジの知識] — 65
LAND OF 1000 CUSTOMS [K FRAME]
モデル別カスタム [Kフレーム] — 133
BIKER'S GOODS [SADDLE BAG]
ハイカースグッズ [サドルバッグ] — 249

DEAR BROTHERS	43
BIKER'S EYE	45
H-D IN MY LIFE	46
カスタム&ペイントナンス(ペイント③)	53
トピックス:	58
高速道路2人乗り看名運動	106
ハイカーストトク	107
はい心す房風	110
O'one & O'one	126
世界の最新カスタムマーク(グリップウインカー)	132
う声のカタログマーク	140
シルバーのこの1台	144
(カバード復活計画)	148
ハイフレボート(ロードマスター新車開設)	169
(車から探険)	171
(AIカーナーのための手話講座)	173
帰ってきたトランブルチャンプ	174
ワワワのハーツ庚延(SEV/パワーアップシステム)	175
みのるの貧乏ヒマなし(サドルバッグ製作①)	178
山ちゃんの楽しく学ぶ内燃機の話	180
スワップミート	182
CALL AT VIBES SHOP	232
バイスとホイ	234
風輪	239
バイカーこだわりの一品	257
アイアンハウス	258
BREEZY	270
VIBES PRESENTS	274
バイブズ・シアター	276

GET INTO ECSTASIES CUSTOM HARLEY

VIBES SHOT — 115

HISTORICAL MODEL

'63 BT

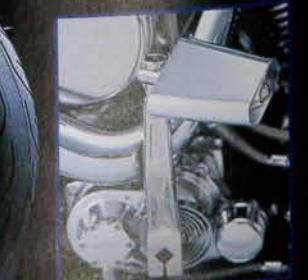
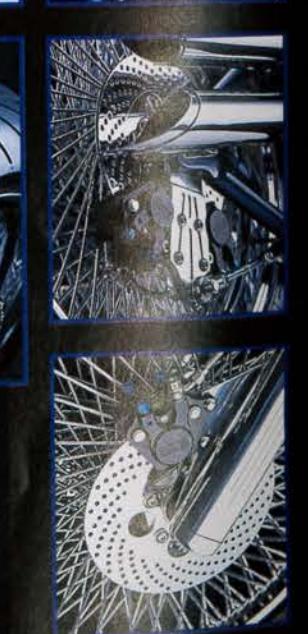
115

165

COVER PHOTO : FUMIHARU KANAZAWA / COVER GIRL : YURIKA ONISHI

[VIBES (vibz)] : vibration (バイブレーション) の米俗語であり“振動する、あるいは振動させる”ことを意味する。形容詞のvibrantは“元気に脈打つ、鼓動する”“活気あふれた、力強い”、また動詞のvibrateは“感動する、わくわくする”という意味を持つ。つまり、ハーレーダビッドソンならではの魅力=まるで生き物のように車体全体を震わせて脈打つツインの鼓動、そしてそこから生まれる力強いスタイルと走りは、見るものをわくわくさせ、操る者だけにすばらしい感動を与えてくれる。そんなハーレーダビッドソンの持つ「鼓動」「力」「感動」が、「VIBES」のテーマです。

NUSHI



TRI JYA。トライジャ。縁起モノの3匹の蛇。オーナー兼製作者の岡本氏に言わせると、この一風変わったお店の名前の由来は、実はそんなところにある。

そして今回のこの「NUSHI」の最大の見所のひとつにも、やはり蛇がからんでくる。

光の具合でパープルにもコバルトブルーにも見えるフェンダーやタンクをじっと眺めてみて欲しい。塗装の内側に蛇柄が見えてはないだろうか。そう、これぞ、まずは見せることありきのトライジャの面目躍如なのである。ああ、それにしても美しいペイント……。

もちろん、見所は他にも山ほどある。

そもそも（クルマの）ローライダー系、つまりは、西海岸系超派手ピカピカのショーカーを得意とするだけあって、フレームのモールディングや、クランクケース下部にまで及ぶ磨き仕上げ（そこに貼られたステッカーは、鏡に写すことを前提に逆版で作ってある）には、全くと言っていいほど隙がない。

エンジンは1565ccのS&Sにネス製ヘッドカバーの組み合わせ。21インチ・160本・15インチオーバーによるフロントまわりが想像するほどヘビーじゃないのは、45度という理屈上も視覚上も納得せざるを得ないネック角のおかげ。エイボン本社に直接注文してやっと手に入れた18-200の極太リアタイヤにも当然160本。ライザータイプのハンドルはベースなしの完全ワンオフで、見た目より遥かに重いアルミ削り出しのシートやキックペダルももちろんそう。バティニーニを意識したというアルミのストレッチタンクや、溶接しまくりでこれ以上ないラインを描くマフラーも、すべてトライジャ製。

実は「NUSHI」には岡本氏以外に4人の強力なメンツが関わっていて、アルミ、鉄板、塗装、組み立てと、それぞれの専門分野で惜しげもなくその手腕を発揮してくれている。そして、パーツ選択・入手の助っ人としては超カーショップが名を連ね、さらには関西のケセモノ達が首尾のほどを見守っているというから、これはもう大変なのである。

こうして出来上がった「NUSHI」は、あえてカテゴライズするならヨーロピアンチップバーということになるのだろうが、しかしホントはそんなことよりも、ただカッコいい、そう言ってもらいたい気もするのだ。

